

「アフリカ研究」所感

●宮本正興

(大阪外国語大学教授)

いまから35年ほど前、大学院に進学した時、私が言語学科を志願したのは「アフリカ研究」に従事したいからというより、むしろ既成のディシプリンとしての「言語学」そのものに魅力を感じたからだった。私の興味を捉えた名詞分類体系を顕著に発達させていたのが、たまたまスワヒリ語をはじめとするアフリカの諸言語だった。どうじに、私は泉井久之助先生の名著『言語の構造』（弘文堂書房、昭和14年初版）、『フンボルト』（弘文堂書房、昭和13年初版）にひどく心酔しており、この先生から言語学の手ほどきを得たいと思っていた。したがって、「アフリカ研究」もスワヒリ語も「独学」であった。

当時は、「アフリカ研究」のどんな分野にしる、そのための独自のカリキュラムを設置しているようなところは皆無だったが、いまでは多くの大学・機関がそのための授業や研究プロジェクトを掲げるようになった。私の勤務先の「アフリカ地域文化専攻」はおそらくその最たる例で、学部入学時から大学院博士課程まで、9年間の一貫した「アフリカ研究」のためのカリキュラムが編成されている。

しかし、一方では、教育のための「特別指定席」の充実を、必ずしも歓迎してばかりはおれない気がしはじめている。まず、「地域研究」のための盛りだくさんな授業の割に、その分、個別ディシプリンの訓練が行き届かない。つぎに、「アフリカ研究」の深化とともに研究テーマが細分化し、現実のアフリカの訴えるものを、トータルな形で一個人では把握することがますますむずかしくなった。学問の進歩に細分化はつきものだろうが、以前は、ある程度までジェネラリストでもありえたものが、役割分担、つまり棲み分けが徹底してきた。現実のアフリカをトータルに認識するなどということは、所詮無理、非現実的なこととして誰もがその努力を止めてしまった。個別に専念して、全体を語る意欲や哲学を失ってしまったかに見える。

「アフリカ研究」にフィールドはつきものだが、フィールドでのデータ獲得が自己目的化して、先行研究や文献解釈をおろそかにしてしまっているのではないかと思うこともある。また、最近ますます気になるのだが、学問がイデオロギーに翻弄されるのは不幸だとしても、冷戦体制の終結後、とくにアパルトヘイト崩壊以後、「アフリカ研究」の脱イデオロギー化というイデオロギー操作が急速に進んでいるように思う。それはアフリカの現実と合致しているのか、誰がそれを進めさせているのか。